

進むに進めず、引くに引けず？ 杉並区の教師養成塾「杉並師範館」を見る

「教師塾」「師範塾」とは何か

いま、独自に教員を養成し、採用する自治体があらわれている。

横浜市も、教職をめざす大学4年生や教員免許を持つ社会人を対象とした「よこはま教師塾」を開設した。

この「教師塾」は原則として土曜日に開講し、1年間の講座を修了した者は特別枠で横浜市の教員に優先的に採用されることとなる。

また、神奈川県も優先採用はないものの、教員志望の大学生や社会人を対象とした講座を開設する。こうした動きは、東京都や京都府でも始まっている。

大学の教員養成課程だけでは、十分な現場課題への対応力は育てられない。とすれば、こうした地域の教員養成システムも、ひとつの手法ではあるだろう。

この「教師塾」「師範塾」のひとつのモデルに、東京都杉並区が開設した「杉並師範館」がある。

この「杉並師範館」は、藤沢市のモデルとなりうるだろうか。杉並区の「師範館」を訪れてみた。

杉並は区費で教員が加配

杉並区の師範館は正式な名称を「教師養成塾 杉並師範館」という。



杉並区「師範館」

定員は30名。選考試験を通過した大学生や社会人が土・日を中心に一年間の講習を受け、修了した塾生は杉並区の小学校の教員として採用される。

ここで特筆すべきことは、この教員は区が独自に人件費を負担する区費教員だ、ということだ。

教員はふつう、都道府県費職員である。

しかし杉並区ではそれらの定数に加えて、区の予算で採用された教員がプラスアルファで加配されるのだ。公務員削減の流れの中で、信じられない話である。

「天に変わって指導をする覚悟を」

ただ、どうにも気になるのが「師範」という大時代な呼称である。

戦前の師範学校の時代ではあるまいし、なぜこのような名称なのだろうと「設立趣意書」を読んでもみると、つぎのように書かれている。

わが国は長い歴史を有し、この間、連綿と独自の光輝ある伝統精神文化を保有してきました。

今、教育体制の中にこの気風と伝統を取り戻すことこそが何より優先すべき責務と 생각합니다。

これではたしかに、「師範」と呼称するのがふさわしいだろう。文脈からすると、「戦後の教育は間違っている。戦前の教育の気風と伝統を取り戻せば、日本の教育は良くなる」とも読み取れるのだが

さらに、塾の「教官心得」になると、こんなことが書かれている。

「忠恕をもって接し 道義をもって説き

知行をもって示し 天命をもって導く」

「 師範館の教官は天の命ずるところ、つまり天に変わって指導をしているという、自覚と覚悟をもって行ってほしいのです」

ここまで来ると、「戦前」どころか江戸時代の学問所か藩校の世界である。「天に変わって指導する」先生が担任だったら、子どもたちはたまらないだろう。

特定の思想や宗教を奉ずる私学ならまだしも、公立学校の教員養成機関として、これでよいのだろうか？

この「師範館」の設立には 山田宏杉並区長の強いリーダーシップがあったと言われる。

ちなみに、杉並区は中学校の歴史教科書に「つくる会」系の「扶桑社版」を採択している区である。

再来年度の塾生募集は中止も？

私に対応してくださったのは、塾のK事務局長。お忙しい中を、丁寧に答えてくださった。

竹村 この区採用の教員は、任期付きなのですか？

K局長 定年まで雇用が保障される正規採用です。

竹村 「公務員削減」が厳しく言われる中で、よくこんな制度ができましたね。毎年30人を採用すれば、10年では300人。やがて膨大な人件費が必要になるのではないですか？

K局長 いえ、これは3年間だけの計画なんです。その先どうするかはまだ決まっていません

竹村 (え、それは初耳だぞ。「杉並のような師範塾を作れ」と主張している議員はどうなるのだ)

そうだったんですか

区費の教員という、ふつうの都費採用の教員と待遇の違いはありますか？

K局長 原則として同じです。給与も都に準じますし、公立学校共済にも加入します。

竹村 管理職にはなれるのですか？

K局長 校長にはなれません。

竹村 (それ、塾生は承知しているのだろうか?)
入塾の選考はどのように行われるのですか？

K局長 論文と面接が中心となります。

竹村 選考の基準は？

K局長 明確な基準は難しいのですが「指導力がありそう」とか、「現場で続きそう」とか

竹村 (そんな主観で人材を選んでいるの?)

講座の過半は「企業経営」と「孟子」？

「師範館」の講座の内容が知りたい、とお願いして、「平成19年度教育計画」をいただいた。

年間30日、小学校での「特別実教育習」がある。教育課題についての講座もある。しかし、師範館の講座の過半を占めるのは、それとは別のものだ。

19年度の年間テーマはふたつ。「企業の生成発展ソニーのケースに学ぶ」と「中国古典思想に学ぶ」。前者はイエローハットや富士ゼロックスなどの企業の役員の講演が主である。

後者は(株)イメージプラン社長の田口佳史氏による「大学を読む」「孟子を読む」などが1年間続く。

教師が民間企業の視点を学ぶことも大切だし、中国の古典の講座もあって良いと思う。全て否定はしない。

しかし、1年間そればかりではこれが鳴り物入りの「師範館」の講座の内容だったとは驚きである。

横浜市が開設した「よこはま教師塾」では、学校関係法規や支援教育、「不登校について」や「人権」「国際理解」といったカリキュラム

月日	曜	主 題
4/15	日	人間の基盤とは何か①
		課題追求
4/22	日	「大学」を読む②
		自学自習
5/13	日	「大学」を読む③
		課題追求
5/20	日	「大学」を読む④
		自学自習
6/10	日	「大学」を読む⑤
		課題追求

がならば。これなら意味があるだろう。

しかし、杉並師範館のカリキュラムで今日の教育課題に対応できる教師が育つとは、どうしても思えない。

すでに退職者が始めている……

「師範館」を辞したのち、どうしても腑に落ちないことがあった。それは、膨大な人件費のことである。

公務員削減が言われる中で、よく認められたものだ。さまざまな資料を調べていくうちに、私は師範館開設の際の「Q & A」の中の一文中に目とまった。

現行法上教員採用を行うのは都道府県または政令都市となっていますが、平成18年度においては区市町村においても採用が可能となる見込みです。

これは、どういうことだろう。ひょっとして、杉並区はもともと、区の負担でプラスアルファの教員を配置するつもりなどなかったのではないかと

人事権が区に委譲される(当然、人件費も委譲されてくる)つもりで、「見込み発車」をしてしまった。しかし、待てど暮らせど人事権は来ない。

そこで「今後の計画は未定」とせざるを得なくなった、というのが真相ではないのか。

だが3年で中断しても、人事権が委譲されない限り杉並区はこの100人近い卒塾生を、今後定年まで雇用していかなければならない。人件費は膨大なものになる。杉並区も気が気ではないだろう。

しかも、この塾はきわめて政治的な色彩を帯びた事業だ。もし、数年先に区長が変わったなら、杉並師範館ははたして存続できるだろうか。

これは推論にすぎない。しかしこれが事実なら、杉並方式は教師養成システムとしては問題が多すぎる。

かわいそうなのは卒塾生だ。現実を知った第1期生の中からは、すでに退職者が始めているという